

eラーニング主体の大学を卒業した社会人の意識変容の分析

Analysis of the Change in consciousness of Adult Who Graduated from University Mainly Providing e-Learning Courses

関 和子*
Kazuko Seki*

向後 千春**
Chiharu Kogo**

早稲田大学大学院人間科学研究科* 早稲田大学人間科学学術院**
Graduate School of Human Sciences, Waseda University*
Faculty of Human Sciences, Waseda University**

<あらまし> 大学の通信教育課程を卒業した社会人を対象に、卒業後の意識変容の分析を行った。その結果、大学での学びや経験を経た社会人には、学習観のみならず、人生観、交友観にも顕在的な意識変容が起こっていた。また、社会人を対象とした教育、eラーニング主体の通信教育課程の課題として、仕事に直結した研究テーマの選び難さ、eラーニング活用上の問題、人的支援体制の不備などの課題が抽出された。このことから、社会人を受け入れる大学では、柔軟性のある社会人向けの支援策構築の必要性が示された。

<キーワード> 生涯学習 M-GTA eラーニング VOD 人的支援体制 意識変容

1. はじめに

1.1. 背景

大学等の高等教育機関では、少子高齢社会時代の大学経営策として社会人の受け入れ推進、および学びを必要とする人のための学習の機会（以下、生涯学習）のしくみ構築が行われている。

平成 21 年度の調査結果によると、公開講座を除いた大学への社会人入学数は推定約 5 万人、内訳は、通学教育約 2 千人、放送大学約 3 千 5 百人、放送大学を除くその他の通信教育課程約 5 千人、残りは履修証明と科目等履修入学者約 3 万 9 千 5 百人となっている（文部科学省 2012）。日本の大学における社会人の受け入れに関しては、夜間部や通信教育、編入学や聴講生など従来から行われていたが、近年の新しい流れとして、社会人のための特別枠や入学選抜の配慮が、生涯学習を推し進めている。一方、課題として、入学後の履修と卒業後の進路・就職の困難さがある（瀬沼 2005）。また、現在、大学に求められている役割は、一度社会に出ても必要に応じて社会人が高度な教育を受けられるリカレント教育の拡充、および、社会人のニーズを満たす多様な学習機会の提供にある（佐々木 2010）。

この様な多様な社会人の学習ニーズ、および遠隔学習者への対応策として、パソコンや携帯端末、インターネット、各種ネットワークなど情報通信技術を用いた学習システムとしてeラーニングは、生涯学習推進の一助となっている。

eラーニング導入の利点は、高等教育機関においては、管理運用の経費節減、学習管理システムによる学習進捗状況把握の効率化、インターネットの双方向性を利用した学習支援のスピードアップにある。同時に、学習者にとっては、個々の都合に合わせて視聴可能なVOD（Video On Demand）教育コンテンツ配信など、非同期分散型eラーニングによる「いつでも、どこでも受講できる環境」の実現にある（松田・原田 2007）。

このように、高等教育機関の生涯学習機関化は、eラーニングの教育現場の普及と連動することによって、大学にとっても、学びを求める社会人にとっても生涯学習推進の追い風となっている。しかし、大学で学んだ社会人の学びに対する満足度、eラーニングの効果と問題点、大学での学びが学習者に与えた意識の変化（以下、意識変容）については、未だ研究が進んでいない。

1.2. 問題提起

前述の通り、大学の生涯学習機関化とeラーニングの普及は、社会人学生の負荷を軽減し、学び易い環境を作りつつある。このような環境下、大学に入学し卒業をした社会人は、大学での学びや経験を通して何を得たのだろうか。本研究では、大学の通信教育課程を卒業した社会人を対象に、大学で学ぶことにより、どのような意識変容があったかについて調査する。その結果をもとに、社会人が大学で学ぶ意味を明らかにする。また、社会人を受け入れる大学側が配慮すべき支援点も示す。

2. 方法

2.1. 分析方法の概略

本研究は、eラーニング主体の大学通信教育課程に在籍した社会人が、卒業後に、どのような進路を選び、学びを継続したか、また、どのような意識が生じたかを詳細に読み解く必要がある。そのため、協力者の意識変容や大学院への進学理由など内的な要素も含む分析が必要となる。そこで、X大学卒業生を対象とした、入学動機に関する研究（関・向後2011）、学業継続と阻害要因に関する研究（関・向後2012）の継続研究の最終段階と位置付け、先の二つの研究と同様の分析手法、協力者、質問紙、データの収集法を用いて、分析を進めた。詳細は以下に示す。

2.2. 分析手法

本研究では、グラウンデッド・セオリー・アプローチを実践しやすく改良した、木下(2010)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いて分析を行った。M-GTAは、協力者の具体例をもとに分析ワークシートを作成しながら概念を生成していく分析方法であり、分析は、(1)半構造化面接、(2)トランスクリプト作成、(3)分析テーマの設定、(4)概念生成、(5)カテゴリー生成、(6)結果図の作成、(7)一般化の手順で理論化した。

2.3. 協力者

本研究の協力者は、関東圏、中部・北陸圏、

関西圏に居住しているX大学通信教育課程卒業生21名（男性13名、女性8名、平均年齢47.3歳、 $SD=9.98$ 、最少35歳から最大68歳）とした。協力者の多様なデータを収集するために、X大学通信教育課程卒業後の進路がX大大学院進学者6名、他大大学院進学者4名、その他11名に調査の協力を依頼した。

2.4. 質問項目

協力者への面接用として、事前に11項目の質問を作成した（表1参照）。質問1から10までは全協力者共通の質問、質問11は大学院進学者に対する追加質問とした。なお、本研究では卒業後の意識変容に焦点を絞った分析を行った関係で、質問7から9、および質問11に対する回答結果を主な分析の対象とした（表1太枠内）。

表1 協力者への質問項目

番号	質問項目
質問1	大学への入学理由は何か？ X大通信課程を選んだ際に重視した点は何か？
質問2	大学で学ぶ必要性、卒業する必要性について、どのように考えていたか？
質問3	入学を決定づけたのは、どのような環境があったからか？
質問4	学業や学生生活を送る上で、困難と感じた点はどのようなことか？ どうやって、困難を乗り越えたか？
質問5	学業を続けられた理由は、どんな点にあったか？
質問6	X大通信課程で学んだことによって、どのような変化や気づきがあったか？
質問7	X大通信課程で得たものは何か？
質問8	X大通信課程で学んだことが、卒業後の人生にどのような影響を与えたか？
質問9	人生全体にとって、X大通信課程は、どのような位置づけになるか？
質問10	X大通信課程への意見や苦情は何か？
質問11	卒業後、大学院への進学理由は何か？

2.5. データの収集

面接期間は、2011年4月から6月とし、協力者の都合に併せて日時・場所を決めた。協力者には、面接に先駆けて、研究の目的、倫理的配慮、面接の進め方に関する説明を行うと同時に、デジタルビデオカメラ、ICレコーダーにて面接内容を録画、録音することに対

する承諾をとった。面接内容の記録用にはデジタルビデオカメラ1台（SANYO Xacti：DMX-CG100）とICレコーダー1台（OLYMPUS Voice Talk：V-61）を用いた。

面接は3人で分担したが、質問項目は統一したものをを用いた。面接時には、質問11項目のほかに話の流れを見ながら関連する話題を自由に話せるよう、半構造化面接法を用いた。面接時間は平均1時間45分で、最少は1時間21分、最長は2時間17分であった。

2.6. 分析テーマと分析焦点者

M-GTAでは、得られたデータに密着した分析となるように、データ収集後に分析テーマと分析焦点者を定める。本研究は、社会人の意識変容の解明を分析テーマとし、X大通信教育課程卒業生を分析焦点者に設定した。

3. 結果

3.1. 概念生成

M-GTAの手順に従い、概念の生成を行った。1人目のデータから、着目する具体例を抜き出し、連番を振りながら概念毎に分析ワークシートを作成した（表2参照）。

表2 分析ワークシート例(部分)

概念	【学友・校友の絆】	
定義	自己の交友観に影響を及ぼした大学の学友・校友との絆	
ヴァリエーション		
201-1	仲良く気が合った連中が多かった。こういう学生のととき付き合った人たちが、そのあと生涯に渡って付き合っていく。	A5
201-2	本心をさらけ出せるような和気あいあいとしたね、グループ作りっていうのは、好きなんですよ。	B14
201-3	働きながら学ぶ人がものすごく多い。皆、しっかりしていて人間として素晴らしい人が多いんです。	B18

たとえば、概念201の分析ワークシートは、自己の交友観に変容を与えた大学の学友・校

友との絆を示した内容のため、概念名を【学友・校友の絆】、定義は「自己の交友観に影響を及ぼした大学の学友・校友との絆」とした。ヴァリエーション欄には「仲良く気が合った連中が多かった。こういう学生のととき付き合った人たちが、その後、生涯に渡って付き合っていく」のように発話の具体例を記録した。

次に、2人目のデータ内にすでに生成済みの概念と同じ着目点の具体例があった場合は、該当する分析ワークシートのヴァリエーション欄に追加した。しかし、新規出現の概念が抽出された場合は、新たに分析ワークシートを作成し、21人目まで同じ作業を繰り返した。その結果、29概念が生成された（表3参照）。

表3 分析ワークシート例(部分)

No.	概念名
201	学友・交友の絆
202	学歴の価値
203	青少年期
204	学習の捉え方
205	学びの到達点
207	学びの実感
208	X大通信教育の回顧
209	自己の生き方
210	大学の授業
211	大学院への進学
212	(自)大学院の選択
213	大学院のデメリット
214	意識変容の認識
215	eラーニングの特性
216	eラーニング活用条件
217a	教育コーチ（肯定）
217b	教育コーチ（否定）
218	大学院のメリット
219	生活上の変化
220	人生の目標
221	後輩への伝達
222	社会貢献
223	通信制のジレンマ
224	大学への提案
225	社会人向け教育
226	(他)大学院の選択
227	進路のジレンマ
228	今後の展望
229	現在の状況
概念数	29

具体例抽出時には、類似例、対極例の抽出を行い、必要に応じて、分割、統合、廃止を行うことでデータの偏りを補正した。併せて、各シートの末尾に概念の関係性などを理論メモとして付記した。なお、概念の新規出現数が、1人目14、2人目4、3人目6で計24個、累積パーセントが全体数の83%を占めた。その後、4人目の時点で、計26個となり、90%となったため、概念生成は理論的飽和とみなした。

3.2. カテゴリー生成と結果図

概念生成と同時に、概念相互の関係を検討しカテゴリーを生成した。以下に、カテゴリーごとに一例を示す。カテゴリーは<>、[]はサブカテゴリー、【】は概念、“”はヴァリエーションの具体例を表す。図1の「社会人学生の意識変容（卒業後の認識）の結果図」は、データから生成した概念やカテゴリーの関係を分類、整理したものである。

3.2.1. <人生観>カテゴリー

“自分の行動になる原理とかに不安を抱えながらやっていたが、理論化が来て、自信になった”，“自分をリクリエートするのがいいと実感した”との語りから、概念【意識変容の認識】を生成した。また，“パソコンで言う上書き修正。本当に苦しい時代だったから、その頃の上書きみたいなことを今している”，“大学卒業資格を得たので、自分の夢とか目標が身近になった”との語りから、概念【人生の目的】を生成した。加えて，“今までの生き方と変わった。自分の日常生活点から、かなり外に出ていく活動が増えた”，“人生なんてずっと勉強。知らないことは一杯あるし、新しいことはどんどん出てくる。それを学びたいと思う時期に遅いも早いもない”との語りから、【自己の生き方】を生成した。

これらの概念は、大学で学ぶことにより、社会人は自己の人生や意識に何らかの変容があったと認識していることを示している。そこで、<人生観>カテゴリーにまとめた。

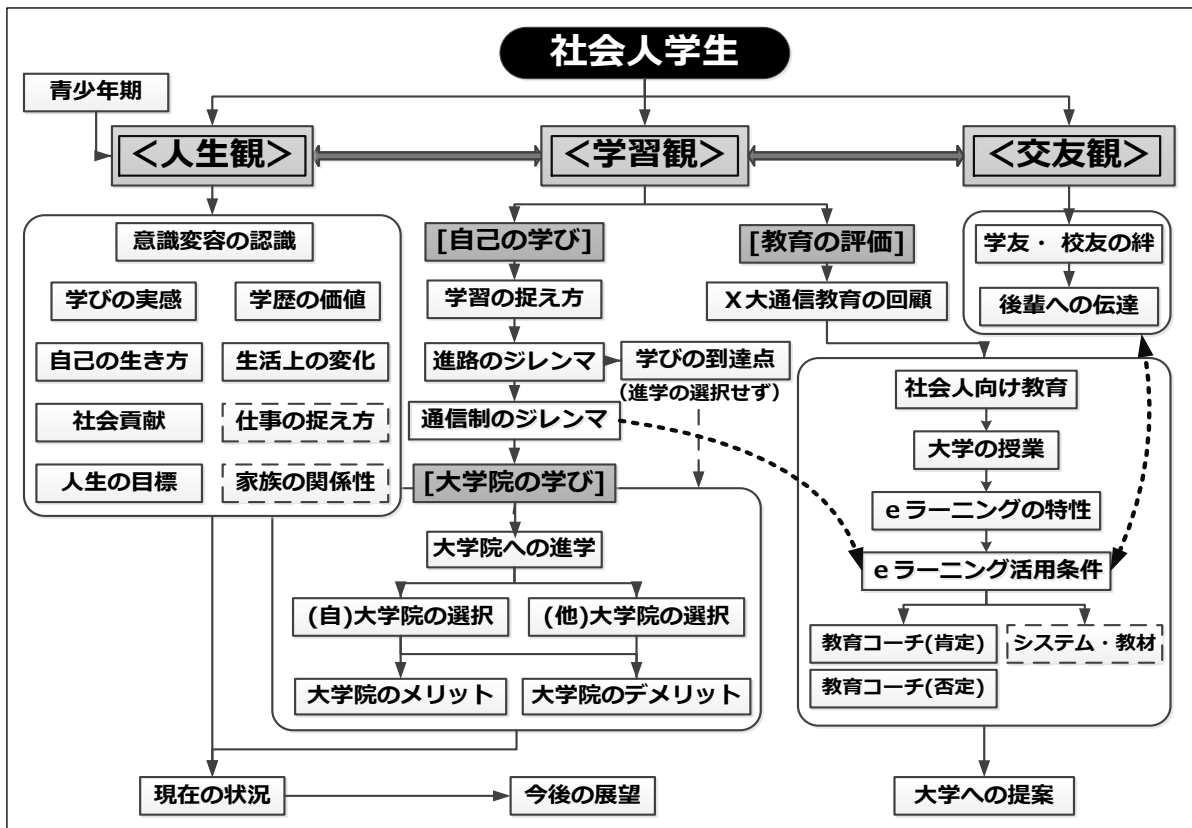


図1 社会人学生の意識変容（卒業後の認識）の結果図

3.2.2. <学習観>カテゴリー

(1)[自己の学び]サブカテゴリー

“横並びでみんなと一緒にやるのは、すごく苦手。だから人に使われるのも使うのもいや。たぶん、通学制で学んでいたらゼミなんかも大人数で、どこかではみ出していた”、“一極集中も必要なんだけど、いろんなところから資料を集めて、それを見て解析する。そういった学び方や分析も必要”との語りから、概念【学習の捉え方】を生成した。また、“学びたい内容、学びを続けられるという2つのニーズが満たせるので、X大の大学院が最適だった。ただ、物理的に無理だった”、“卒業直後は、もう勉強なんて二度とやりたくないと思った。ただ、去年一年間の苦労はかなりだったので、それでわかってきたことが沢山あり、さらに学びたい”、“仕事をしないで、大学院で勉強できるならいい。けれども仕事がない業界のため、2年後が心配。全部自己責任なので、不安になる”との語りから、概念【進路のジレンマ】を生成した。併せて、“学歴やX大のネームバリューに憧れてきたということもない。私にとっては昔のこと。だから、今来てこんなに嬉しいというのは純粹に学問、最新の学問、素晴らしい学問に接することが出来た喜びが第一で、それが、すごく大きい”、“一通りやった感があるので、今だからこれを学びたいと思うものはあんまりない”との語りから、概念【学びの到達点】を生成した。

これらは、卒業後、自己の学習観に何らかの影響があったことを認識したとの内容のため、<学習観>カテゴリーの[自己の学び]サブカテゴリーに含めた。

(2)[大学院の学び]サブカテゴリー

自己の学びに関しては、X大通信教育課程の卒業を学びの達成点とせず、卒業後に大学院に進学することを視野に入れる内容も含む。

“通常の大学に行ってる分には堂々と言えるが、通信制というのは引かかっている”、“仕事をしながらで、パソコンもできて、環境が合い、お金もある程度あるのであれば通信教育課程を勧める。しかし、身体が空いているなら、通う方がいい”という語りから、概

念【通信制のジレンマ】を生成した。また、“今までずっと学び続けてきた。それを途切らせたくなかった。(中略)学ぶことそのものを継続させていきたい”、“学部での研究は物足りなかった。もっと調べたかった。ただ、推薦だから行ったところもある”との語りから、概念【大学院への進学】を生成した。

また、大学院への進学は、自大と他大に分かれていた。“某学問は、学部のゼミの2年間では、極め尽くせない。もっと追いかけてみたい”、“大学までドア・ツー・ドアで40分だった。(中略)また、大学の先生をやってみたくらいという思いもあったので、eラーニングではなくて、生でキャンパスの学びとか、方法とかを体験してみたかった”との語りから、概念【(自)大学院の選択】を生成した。“他大の大学院を選んだ理由は、オフィスに近い。あと試験がなかったこと”、“修士もと思って、居住地の大学とか色々見たけれど、金掛かるし、また通うのもなあ。それで某通信教育制でええわって思った”との語りから、概念【(他)大学院の選択】を生成した。

“以前は、通学できずにいた。今度は通学できる環境もあるし、週に2日ないし1日半ぐらい大学に行けば良い。僕らはオンデマンドで大学院の授業も取れる”、“自由に勉強が出来る時間と権利を得たことは、非常に喜び”との語りから、概念【大学院のメリット】を生成した。一方、“大学院に上がる時に研究計画書出してOKを貰っている。それが倫理審査で根底から何かぐちゃぐちゃにされた。大学院を辞めようかと思った”、“X大通信教育課程を出た時点で、教える仕事の話が少しあった。逆に大学院まで行ってしまったことで煙たがられている”との語りから、概念【大学院のデメリット】を生成した。

これらの概念は、通信教育課程の大学を卒業した社会人の大学院進学やその際の意識変容を示しているため、<学習カテゴリー>の[大学院の学び]サブカテゴリーに含めた。

(3)[教育の評価]サブカテゴリー

“X大通信教育はイメージしていたものと全然違った。通信教育は、自分で学習し、自分でレポート書く、一方通行のイメージだっ

た”，“人生をステップアップさせる場であったことは確か。当初考えた，知識を広げるということではなくて，いろんなモチベーション，意欲，意識，動機づけを与えてくれたところ”との語りから，概念【X大通信教育の回顧】を生成した。“大人の学びの場なので，学ぶ側が自分で解釈して自分で対応していくべき”，“仕事と密接になっているからこそ会社から評価される。ただ知識を得るだけではなく，ゼミでは，自分が持っている課題をぶつきたい。しかし，その時には，周りに情報が漏れないしくみが欲しい”との語りから，概念【社会人向けの教育】を生成した。

“eラーニング時，文字でのディスカッションだと言葉の行き違いとか，問題が起きる”，“リアルタイムに質問が出来ないというのが大きい。分かんなくても，それを解決する手段が無い訳です”との語りから，概念【eラーニングの特性】を生成した。また，“能動的に食いついていかないと，すぐ眠くなる。いかに自分のモチベーションを高めて，その画面に食いついていくかっていうとこだと思う”，“BBSの使い方は，どこか血が通った方がいい”との語りから，概念【eラーニング活用の前提条件】を生成した。

“実際に先生とやり取りしたというのは，後半2年間の中で，あんまり無い。実はほとんど教育コーチとやり取りしていた。だから，この教育コーチがいたから卒業できた”，“コーチがよく見てくれたのは，文章の章作りとか，ここはこうの方がいいとかだった。なるほどなあと思った”との語りから，概念【教育コーチの対応(肯定)】を生成した。他方，“すごく細かく対応してくれるコーチとかがいる。あまり対応してくれると逆に聞きづらい。大変そうだなと気を遣ってしまう”，“教育コーチによって，投稿に対するレスポンスの速さが違った。授業では，最初の挨拶しか出てこないなど，それは寂しい。だから，教育コーチの位置付けというか，ある程度お金貰ってやっている人たちだから，もうちょっと充実できたらなあ”との語りから，概念【教育コーチの対応(否定)】を生成した。

“社会人だから奨学金はいらないではなく

て，使いやすい奨学金を通学生と同じようにどんどん拡充する。そうすると高く払っても奨学金で半分戻ってくれば，家計は楽になる”，“入学前にパソコンの環境をどうのこうの言うんであれば，全部統一したX大通信教育課程モデルのプリインストールパソコン（を配ること）が，一番公平”との語りから，概念【大学への提案】を生成した。

これらはeラーニング主体の大学のしくみや人的支援体制の要となる教育コーチに対する意識を示しているため，＜学習観＞カテゴリーの[教育の評価]サブカテゴリーに含めた。

3.2.3. <交友観>カテゴリー

“いろんな職種，いろんな考え方を聞くのが非常にためになる。特にX大通信教育課程の中では，ダブルスクール，セカンドスクールかな，2つ目の大学の方が多い”，“人間に対する捉え方，人間集団に対する見方，そのフレームワークがものすごく増えた”との語りから，概念【学友・校友の絆】を生成した。

“失敗してもやったということは残る。何で失敗したかもわかるし，上手くいったら，どうやったら上手くいったか，経験談をすることが出来る。先輩は口だけじゃないよというところも見せたかった”との語りから，概念【後輩への伝達】を生成した。

これらは，大学生活を送ることで得た学友や校友，後輩との関わりの中で生じた意識変容を示しているため，＜交友観＞カテゴリーに含めた。

4. 考察

4.1. 人生観に関わる意識変容

所定の単位を取得し大学を卒業した社会人は，大学での学びや経験を経たことにより，人生全般においても種々の意識変容が起きていると認識している。たとえば，社会人は大学における体系的な教育を通して学びの実感を得ている。その結果，学びは「大学入学の潜在的遠因となった過去の挫折経験に起因するコンプレックスや遣り残し感（関・向後2011）」を緩和した。また，新たな知識の取得や学業推進の原動力となったと捉えている。

また、学業を終えたことにより、学歴の付加、苦勞を乗り越えて学業をやり遂げたことで得た自信についても認識している。これらの意識変容は、社会人の場合、物事に対する考え方や生活上の変化として表出するだけでなく、自己の生き方の方向性を再認識する機会、新たな人生の目標を生み出す役目を果たす。

4.2. 学習観に関わる意識変容

4.2.1. 自己の学び

定年退職後、第二の人生を送りながら大学で学び始めたシニア層は、大学で学ぶことにより喜びを見出し、卒業後もさまざまな学びに取り組もうとの意識が強化されている。

一方、大学での学びや経験を仕事に生かせると期待して入学した若中年層の社会人は、在学時を振り返る中で、大学での学びは仕事に直結し難いとの認識が変わっている。具体的には、大学で得た知識や卒業資格だけではキャリアアップには不十分であることを認識し、「大学の学びは学び、仕事は仕事」と割り切る。このように、仕事と学業を分離せざる得ない要因は、(1)正規の大学卒業資格を得られる学部のカリキュラムは、職業訓練を主軸にした専門学校や専門性に特化した大学院における研究とは根本的に異なり、実践的とはいえない、(2)卒業単位を満たすためには、多岐に渡る科目の履修が必要となり、特定分野の専門性のみでの向上は計り難い、(3)アカデミックな文書作成や論理的な思考力の向上が教育目標の主軸となるため、仕事上の効果としては表れ難く、学びの効果を認識するまでには一定期間を要する、の3点が挙げられる。

以上のことから、大学卒業の満足度や達成感、学ぶこと自体に人生の喜びを見出しているシニア層の方が高く、仕事への直接的な効果を期待していた若中年層の社会人の方がやや低い傾向が読み取れ、学びのやり残し感があることが示された。このシニア層の学ぶ喜びと、若中年層の学びのやり残し感が、大学院進学へと繋がっている。

4.2.2. 教育の評価と必要な支援

社会人は、大学において自己が受けた教育

の内容やしくみ、人的な支援体制に対して、客観的に評価をしている。その結果、研究テーマの選択の難しさ、eラーニング活用上の問題、人的支援体制の不備の3点は、大学側の支援が必要となる社会人特有の課題とした。

まず、1つ目の課題は、研究テーマの選択の難しさである。仕事を持つ社会人は、大学のゼミに所属し、研究テーマを決める際に、自己の仕事上のフィールドで調査を行ったり、実験を行ったりすることに躊躇し、研究テーマを変更している。たとえば、会社から大学に派遣されているケースを除き、社会人学生は個人として大学で学んでいるため、会社の協力や理解を得難い。もしくは、大学で学んでいることを会社には伏せているなどの事情を抱えている。そのため、会社の技術情報に触れるような研究テーマや内容を選ぶことには制約があり、入学時に思い描いていた「仕事に生かすための研究」は、途中から、「研究手法を学ぶための研究」の意味合いに変化する。その結果、学習者の学習に対するモチベーションの低下を招く。このことから、社会人受け入れ大学では、社会人が学びやすい教育のしくみとして、すでに大学院等で一部導入されている、指導教員と学生が秘密保持の契約を結び行なう「クローズドの研究形態」なども、検討していく必要がある。

2つ目は、eラーニングの活用上の問題である。一般的に、eラーニングを教育現場に導入したり、運用したりする際には、システムや教材の質や完成度に評価は偏りがちである。しかし、eラーニングで学ぶ学生たちが根本的に抱えている問題は、双方向性を生かしたオンライン上のディスカッションやディベートに馴染めない、慣れない、学業に生かし切れないことにある。そのため、社会人学生は、距離と時間の制約から解放されるeラーニングの利便性は認めながらも、「eラーニングは、独学には向くが、大学らしい、双方向性の学びの実感は得難い」との学習観を示す。その結果、大学院進学時には、事情が許せば、eラーニングのみの教育形態ではなく、対面式のゼミにて研究を行いたいとの意識が変わる。子どもの頃からディスカッションや

ディベートの授業や訓練を受けて基本的な対話スキルが身に付いている欧米人と異なり、対話スキルが身に付いてない日本人は BBS 上でも苦勞する。したがって、大学教育の効果や学生の満足感を高めるためにも、社会人学生に e ラーニングを提供する場合は個々の学生の対話力やディベート力の向上を図るためのカリキュラムや機会は必須である。

3 つ目は、人的支援体制の不備である。e ラーニングでは、良質なシステムのほかに、学習の補佐役である教育コーチ、もしくはチューターなどの人的支援体制は欠かせない。しかし、現状では、様々な背景を持つ、学習レベルもまちまちな社会人学生に対応できる、手厚い人的支援体制とはいえ、現状では、不備が多い。これらのことから、社会人学生の学習の満足度と達成感を高めるためには、人的支援体制の拡充は避けられない。

4.3. 交友観に関わる意識変容

通信教育課程で学ぶ社会人学生は、通学制の学生に比べて、学友、先輩、後輩と交流する機会は極端に少ない。しかし、社会人学生にとって、同じ立場の社会人学生同士の交流は、精神的な支えになるだけでなく、前述の人的支援体制の不備を補う役目を果たしたとの認識を卒業後の社会人は持つに至っている。このことから、社会人学生の効果的な学習推進のために、大学側は学生同士の交流を推奨し、必要に応じて、卒業生たちが後輩の指導や助言が可能な教育のしくみ、支援人材バンクの創出なども、今後の課題となる。

5. 結論

本研究では、大学の通信教育課程を卒業した社会人を対象に、卒業後の意識変容の分析を行った。その結果、大学での学びや経験を経た社会人には、学習観のみならず、人生観、交友観にも顕在的な意識変容が起こっていた。また、社会人を対象とした教育、e ラーニング主体の通信教育課程の課題として、仕事に直結した研究テーマの選び難さ、e ラーニング活用上の問題、人的支援体制の不備などの課題が抽出された。このことから、社会

人を受け入れる大学では、柔軟性のある社会人向けの支援策構築の必要性が示された。

謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、貴重なお話を聞かせていただきました 21 名の皆様に心より感謝いたします。また、面接やテープ起こしにご協力いただきました田中あゆみさん、塚本恵里香さんに深く感謝いたします。

なお、本研究は平成 22～26 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)22500942「成人教育学の視点に基づいた生涯学習のための e ラーニングの構築と実践」による助成を受けています。

参考文献

- 木下康仁(2010) ライブ講義 M-GTA—実戦的質的研究法 修正版 グランデッド・セオリー・アプローチのすべて。弘文堂、東京
- 文部科学省(2012) 第3回雇用政策研究会「大学・専門学校等における社会人の学び直しについて」——社会人入学者数の推移(大学)
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002b9xq-att/2r9852000002ba21.pdf>(参照日 2012.09.10)
- 佐々木正治(2010) 生涯学習社会の構築。福村出版、東京
- 瀬沼克彰(2005) 発達する大学公開講座。学文社、東京
- 関和子、向後千春(2011) e ラーニング主体の大学に入学する社会人の潜在的動機に関する分析。日本教育工学会研究報告集, JSET11-5, pp.9-16
- 関和子、向後千春(2012) e ラーニング主体の大学を卒業した社会人の在学時の学業継続要因の分析。日本教育工学会研究報告集, JSET12-3, pp.107-114
- 松田岳士、原田満里子(2007) e ラーニングのためのメンタリング—学習者支援の実践。東京電機大学出版局、東京